

# 教務だより

2013年11月号  
茗溪塾

茗溪塾教務部 03-3659-8638

## 一念、岩をも通す

茗溪塾塾長 宇野 雅春

受験本番が刻々と近づいてきます。それぞれの目標に向けて「努力」をしていることと思います。自分が「努力をしている」と感じるレベルはなかなか基準が高いようで、受験生の数人に「努力をしていますか？」という質問をぶつけてみたところ、「もちろん！」という生徒は皆無で、「多少は努力している」がほとんどでした。結構がんばっている生徒も努力していると自分で胸をはって言うほどには状況が煮詰まっていないようです。

そもそも、努力というのは、自分ができないものをできるようにするために払う力の使い方で決まってくるもので、何でもできる生徒なら努力は必要ないことになります。ただ、この受験期の努力は、ほとんどの受験生がするもので、むしろ何もしなかった場合に問題が多く起こります。

たとえば、進学した学校を辞めてしまうケースは、自分自身が最後まで努力せず、「何となく進学した」場合が圧倒的に多いようです。

その一方で、十二月から直前まで、「努力の極み」に到達する生徒がいます。そしてその生徒は、自分でも思わぬほど力を伸ばし、届きそうにないと思っていた志望校に、合格するにいたります。

これが私たちが出くわす「一念、岩をも通す」型の生徒です。毎年思い返してみると最終盤、この努力のレベルに達した生徒はたくさんいました。

具体的に整理してみると、がんばる生徒の第一の特徴は、「学習の場」をしっかりと持っていることです。少しの時間でも有効に使います。たとえば、授業終了後も、残って習ったことの質問や、やり残しの整理をします。つまり、自分が集中できる時間をどのくらい確保できるかが重要なのです。どんなに長い時間を学習に当てていても、友だち同士でおしゃべりをしているのでは、まったく無駄な時間になります。また、たくさんの教材があっても、時間の使い方が下手だとなかなか消化できず、どれもこれも中途半端で終わってしまいます。

中学受験、高校受験、大学受験、どの受験でも大切なのは学習時間の多さではなくその中身です。言い方を変えれば、学習自体が本当に「合格したい一心」でするものであれば、「わかる」を主眼においた学習となり、効果が期待できるのです。この「わかる」学習に到達するのが早いほど成績は安定するし、成績も上位になるのは当たり前のことですが、出遅れた生徒でも、この境地に達したときは、短期間で急激な変化が起こります。

ちょっとしたことがきっかけで、ずっと学習への意欲がそがれ続けていた生徒でも、やっと受験が誰のためのものでもなく、自分のためのものであることに気づくと、そのとき、学習への対応が変わってきます。兄弟姉妹と比較され続けたり、親のそもそもの期待に応えきれていないことへの苛立ち、他のこと（ゲーム・遊び等）に興味がいって頭がそのことでいっぱいだったり、そんな生徒たちが、いよいよ自分の進路が自分自身にとって決定的な意味を持つことに気がついたとき、それは起こるのです。

そこには今までと違う学習体験があります。わからなかったことも少しずつわかるようになり、苦痛だった勉強にも充実感が出てきます。そして、自分が「伸びている」と自分で実感できるようになります。そして、思わぬ「合格」が、ついにやってくるのです。

「一念、岩をも通す」。そこが人間のすごいところだと思います。

(塾長著書「合格への道しるべ」より)